

書評

下山晴彦, 中嶋義文 編
鈴木伸一, 花村温子, 滝沢 龍 編集協力
公認心理師必携

精神医療・臨床心理の知識と技法

井村 修

公認心理師法が 2017 年 9 月より施行される。心理職の国家資格がいよいよ誕生である。心理技術者の国家資格が検討され始め、約半世紀の紆余曲折を経て、ようやく実現した。日本の心理職もやっと国際水準に達したのだろうか。公認心理師法では、公認心理師の業務を以下のように規定している(公認心理師法第二条より)。

- (1) 心理に関する支援を要する者の心理状態の観察, その結果の分析
- (2) 心理に関する支援を要する者に対する, その心理に関する相談及び助言, 指導その他の援助
- (3) 心理に関する支援を要する者の関係者に対する相談及び助言, 指導その他の援助
- (4) 心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供

そして、これらの業務を、医療・保健、教育、福祉、司法・行政、産業などさまざまな分野で実践することが期待されている。とりわけ国家資格が前提の医療・保健分野では、心理職の国家資格化が待ち望まれていた。したがって、本書『公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法』は、タイムリーな企画といえるだろう。

本書の特徴は総勢 122 名からなる多彩な執筆陣にある。精神医学と認知行動療法が基盤になっているが、精神医学の研究者から臨床医、臨床心理学の研究者から心理臨床の実践家まで幅広い。

また、第 1 部で「チーム医療と心理師の役割」、第 2 部で「精神医療の基本」、第 3 部で「精神医療システム」と医療に関するテーマが扱われ、第 4 部で「心理師の専門技能」、第 5 部で「問題別心理介入プロトコル」と、公認心理師としての業務と直結したテーマが扱われている。

第 1 部～第 3 部の中で、これまで心理学系の大学・大学院で教えられてきたことは、第 4 章「精神症状のみかた」と、第 5 章「診断とその経過」であり、その他の章はほとんど教わっていない。精神科の病院に就職した卒業生から、医療の現場に行って驚いたことは、感染症予防の手洗いを指導されたことだと聞いたことがあった。第 1 章にはその手洗いが図解されている。医学の常識が心理の教育では十分でなかったことが分かる。

第 7 章の「薬物療法」の説明も有用である。処方用量例と副作用も示されているので分かりやすい。ある程度の薬物療法の知識は、公認心理師がチーム医療を担うためには必要である。

本書の最大の特徴は第 5 部である。第 17 章の「抑うつ障害」を例に挙げると、まず抑うつ障害の総論があり、理論と心理的アプローチが解説されている、次に心理的アプローチのプロトコルが示され、症例提示、心理的アプローチの実際、本症例のまとめとなっている。わずか数ページではあるが、うつ病の心理的アプローチのエッセンスが記載されている。統合失調症スペクトラム障害や心身症など、他の精神障害に関する章も同じような形式になっている。

本書は、公認心理師を対象としたものではあるが、公認心理師をめざす大学生・大学院生も活用できる良書である。さらに、第 4 部と第 5 部は、精神医療において公認心理師が何ができるのかを示しており、精神科医や看護師に読んでいただければ、より質の高いチーム医療が可能となるだろう。

(大阪大学教授・臨床心理学)

●B5 360 頁 2016 年 9 月 定価: 本体 3,200 円+税 医学書院刊